

チューリッヒ散策

ギンジツク恭子

春を迎えてから、チューリッヒの街にも活気が戻ってきている。2月の半ばから、長く続いていたコロナ規制が緩和された。まず、レストラン入店や催し物参加の際のマスク着用やワクチン証明提示が必要なくなり、さらに、4月からは公共交通機関のマスク着用義務も解除された。ただ、コロナ感染者がなくなったわけではない。身近なところでも、かかった人はけっこういる。ただ、周りを見る限りでは、ワクチンを接種した人は比較的軽くて、そうでない人はかなり重い症状だったようだ。とにかく、これからはコロナウイルスと共存ということなのだろう。

気候が良くなって、街のカフェやレストランの屋外席でお茶や食事を楽しむ人が多くなった。スイスの5月、6月は気持ちのいい季節である。気候変動で夏はかなり暑くなったが、それでも、日本のような湿気がないだけ過ごしやすい。そんな初夏には、街の散策も楽しいものだ。早く暗くなる冬とは違って、日が長いのもなんとなく心を浮き立たせる。



チューリッヒ旧市街：
リマット川に架かる橋から見えるフラウミュンスター

スイスにはたくさん美しい町があるが、チューリッヒが一番好きだ。そこで働いてもいたし、チューリッヒは私の生活圏にある。街の中心には、リマット川を挟んで旧市街の古い町並みが広がっていて、石畳の街路と中近世から残る建物には風情がある。一方、近年、チューリッヒ中央駅近くの西の地域が開発されて、レストランやオフィスが入ったビル

の並ぶモダンな区域になっている。

その昔、スイスに日本人観光客のツアーがたくさん訪れていた時代があった。日本人のガイドさんなどに聞くと、コロナ前からのことだが、昔と比べて団体旅行客はだいぶんと減ったそうだ。全盛期の頃は、ガイドさんは大忙しだったらしい。その頃のコースは、ユングフラウなどで有名なベルナーオーバーランド地方に向かうのが一般的だった。やはり、スイスと言えばアルプスの山のイ

メージなのだろう。そんなわけで、チューリッヒは、空港から山の方へ向かう途中にバスでちよつと回るくらいだったようだ。だが、私としては、チューリッヒは、2泊くらいはしてゆっくりと味わってほしい街である。

まず、チューリッヒ中央駅が印象的だ。地上は終着駅形式で、3番線から18番線まである。子供の頃に観たヨーロッパ映画の影響か、終着駅という言葉には旅情を誘われる。15本の行き止まり線路のその先の構内は、天井がたいへん高くて広々としている。日本と違って改札口はない。毎週水曜日は、ここに市が立つ。クリスマスには、クリスマスマーケットで賑わう。その他にも年間を通して、様々なイベントが開かれる場所である。地下は通過駅になっていて、全部で10番線通っている。このうち4本は8年ほど前に開通したが、地下のそのまた地下を通る。新設に伴って、駅のショッピング街も拡張された。日曜日も営業できるようになったのは、いつ頃からだったろうか。すべての変化がゆっくりやってくると言われたスイスにも、時代の波が押し寄せて久しい。

さて、中央駅の正面玄関を背にすると、目抜き通りのバーンホーフシュトラッセが見える。チューリッヒ湖まで続いているショッピング通りだ。その変遷に触れると長くなるが、以前は、世界一洒落たショーウィンドーが並ぶ通りと言われていた。今は、駅の近くは比較的安いものを売る店が並ぶようになって、高級店はもう少し通りを進んでからになる。消えていった老舗の店もいくつもある。行き交う人々の格好も変化した。だが、言わずと知れた時計の国、有名時計店はまだ多い。

大銀行やサヴォイホテルなどが面しているパラデ広場まで15分ほど歩いて、左に折れるとリマツト川沿いにフラウミュンスターがある。観光客には、シャガールのステンドグラスで有名だ。そこから橋を渡って、大寺院グロスミュンスターに行く階段を上る。目的によっていろいろだが、路地の散策をするなら、グロスミュンスターからは右岸の石畳の道、ニードールドルフ通りを駅の方に向かって歩くのがいい。スイス始め各国料理のレストランや居酒屋などが並ぶ賑やかな通りだ。ちよつと路地を入れれば、小さくてお洒落なブティックがあったり、思いがけない発見があったりする。また、左岸の川沿いの石畳の道も素敵だ。ゆるやかな道を上って、リンデンホーフの丘から眺める対岸の家並みと遠くの風景も美しい。

チューリッヒは、文化の街でもある。音楽、美術、演劇など様々な分野で、国際的な芸術家が活躍している。また、あのアインシュタインを輩出したチューリッヒ連邦工科大学がある。ミュージアムも豊富だ。チューリッヒ市美術館には、印象派をはじめ素晴らしい作品がたくさん展示されている。それから、リートベルク美術館という有名な東洋美術館がある。日本から国宝級の彫刻や絵

画を招聘した展覧会も多く開かれて、いわばスイスに於ける日本美術の発信地となっている。「禪の美術展」「能面・能装束展」（その昔ヨーロッパに伝わった加賀の前田家由来の能面が寄贈された展示）「等伯展」（国宝の松林図屏風など展示）「観音展」などはたいへん好評だった。この美術館は、リーターパークという大きな公園の中にある。ここで、展覧会に伴う日本祭りも何回か開かれた。リートベルク美術館は、その昔私が長く働いていた場所で、今でも訪れるたびに思い出が蘇る。振り返ると、私が来た頃とは比較にならないほど、日本は知られるようになったものだ。

ここはまた、古今の著名人が多く滞在した街で、其処此処にその面影が残っている。ゲートルが訪れたレストランヤ、レーニンが亡命していた時に間借りしていた家には、外壁に表示が出ているし、スイス人の作家ゴットフリート・ケラーが住んでいた家も旧市街にある。ダダイズム発祥の地で、溜まり場だった場所は今も変わりなく使われている。リヒャルト・ワーグナーやジェームス・ジョイスもチューリッヒに住んだことがあった。その他数え上げればたくさんの有名な人々が暮らした街だ。

チューリッヒは、スイスで一番大きい都会だが、人口はおよそ40数万人である。緑が多く、湖沿いもずうっと公園になっていて、人々の憩いの場だ。街中にはくまなくトラム（市電）が走っているが、旧市街だけならゆっくり歩いて回れる。初めて来た時には、東京育ちの私には小さく感じられたものだ。だが、知れば知るほど、小都市ならではの魅力があつて、愛着を持つようになった。

そんな小さな都会にも、世界の大きな変化の影響が見て取れる。まずは、この二十数年の間に、様々な顔立ちや肌色の人が増えたこと。2021年の統計では、チューリッヒに住む外国人の割合は、およそ32パーセントだという。世界で紛争や戦争が続き、また、世界各国の経済状況が悪化し続ければ、チューリッヒの外国人在住者の数も増え続けることだろう。当然、上手く舵取りをしなれば、将来的な摩擦も予想される。今は、ウクライナでの戦争で、スイス全体に5万人ほどの避難民が入ってきている。政府は、今後10万以上の人が避難してくることを見込んでいるようだ。本来なら、自分の国で暮らすことが一番幸せなはずなのに、一握りの者が始めた戦争で運命を狂わされた人々。チューリッヒの美しい街並みを見ながら、破壊される前のウクライナの町や村を想って心が曇る。そこに住んでいた人々の穏やかだったはずの暮らしを想って胸が痛む。戦争は絶対に許されざる行為だ。

日本で暮らした時間より、こちらでの年月の方がとうに長くなった。チューリッヒを散策しながら、私の中で過去と現在の時間が交錯する。